ISSN 2186-5647

OS-2

千葉県における地域防災連携の取り組み

日大生産工　○古田　莉香子

1.　はじめに

1.1 背景と目的

近年、大規模化・多様化する災害に対して、日々の災害対策として、さまざまな防災に関連したイベントや、取り組みが全国的に行われている。筆者自身は、習志野市消防団に所属しており、日常的に火災出動を想定した訓練や、防火活動、大規模災害を想定した訓練や市内での防災イベントなどの多岐にわたる活動を行っている。

地域防災の要として、位置付けられるのが消防団である。消防団は「自分たちのまちは、自分たちで守る」をスローガンに地域の防災に関わるだけでなく、まちの安心・安全のために地域のお祭りやイベントなどの際にも活動を行い、積極的にまちとの関わりをつくり、顔のわかる関係の構築を行うことで、地域コミュニティとのつながりを醸成している。

こうした活動の中で、地域の中でも存在感のある大学と、地域の消防団とのつながりを少しでも図ることができるのではないかと考え、いくつかの防災イベントをこれまで実施してきている。本稿では、防災教育を目指したイベントおよび、消防団として地域連携を行っているその実態について報告する。

1.2　対象事例

本稿では、これまでに習志野市消防団に協力をいただき実施を行った、小学生を対象とした防災教育のイベント「防災チョークアート」(2021 年実施)および「防災脱出ゲーム」(2023 年実施)の 2 事例について報告する。

また、千葉県の女性消防団員を対象として行っている、活動事例の報告をあわせて行う。

2.　習志野市における防災教育の事例

2.1　「防災チョークアート」

防災教育を目的として、大学周辺の小学生・およびその保護者を対象に「暑い夏を吹き飛ばせ！防災チョークアート」と題して、2021年8月に、生産工学部5号館横の駐車場にて実施。習志野市消防団第5分団の協力のもと、水消火器を使った消火訓練、および実際の消火ホースを用いた放水体験を行った。

手順としては以下の通りである。①アスファルトにチョークをつかって参加者全員で絵を描く。絵については何でも可、ただし大学生は防災に関する絵も描く。②絵を通じて防災に関するクイズや豆知識を学ぶ。③チョークで描いた絵をめがけて水消火器を使って消す。その際に消火器の使い方を学ぶ。大人は消火ホースを用いて放水体験をしながら絵を消す。④ポンプ車や消火ホースなどの仕組みを実際に本物をみることで学ぶ。

実際には、コロナ禍での開催だったため、マスクをすることでの熱中症対策や距離をとることなど、さまざまな課題が生じたが、大人からこどもまで、大学生を含めて、消防体験を行うことができる機会が創出できた。

一般的に、防災に関するコミュニティは、避難所の設定圏域のため、小学校圏域で構成されることが多い。ただし、小学校規模のような大規模なものではなく、実際にはさらに細分化された自治会規模での小規模なコミュニティにおいて防災活動を行うことがほとんどである。小学校でも避難訓練が行われるが、それとは異なり、大学生が介入するこ

図１　「防災チョークアート」イベントの様子

Collaborative Approaches to Community-Based Disaster Prevention in Chiba Prefecture

Rikako FURUTA

とで、普段とはことなる学びが増えると考える。また、大学生にとっても、小学生との対話から、さらに実践的な防災について学び、自分自身のこととして考えるきかっけとなる。一人暮らしをする学生や地元ではない場所で生活をしている学生がみられる中で、普段顔を合わせることのない、地元の方や消防団との関係づくりは、いつ災害が発生するかわからない昨今の状況のなかでも、特に重要なものであり、こうした活動を通じて場の創出から、顔のわかる関係性の構築につながることが非常に重要であり価値ある体験になると考える。

2.2　「防災脱出ゲーム」

「防災脱出ゲーム」は4つの防災に関するゲームを行いスタンプラリー形式でクリアを目指す防災教育を目的としたゲームである。2023年10月に、プラッツ習志野において実施した。対象は市内近隣の小学生である。

4つのゲームは、①迷路②停電③救助④消火であり、それぞれゲームの中で防災に関する豆知識を学ぶことができる。例えば、③救助ではてこの原理を用いて、下敷きになった要救助を救い出す、体験型のゲームになっている。親子で挑戦し、力がなくても簡単に救助ができることが学べる。また②停電では、実際の停電を想定した暗い部屋において、工夫を行うことで限られた照明器具でも部屋を明るくすることができる仕組みを学ぶことができる。この防災脱出ゲームでは、体を動かし、頭つかって考える機会を創出し、災害への備えを楽しくゲーム感覚で学ぶことができる。想定の対象者は、小学校中学年以上を対象としていたが、イベント当日には、小学校低学年から幼稚園児の参加もみられ、多くの方に参加をいただくことができた。

いずれの防災イベントも、小学生を対象に「楽しく学ぶ」を目的として開催しているが、どちらも想定とした対象者の範囲を越えて、大人からこどもまで、さらに企画者である大学生も多くの学びを得られる機会となった。

地域で開催される防災イベントや災害訓練などは比較的、高齢者の参加者が多くみられ、次いで、小学生のこどもがいる世帯が多くみられることが一般的である。そのため、単身者世帯や、大学生、中学生などの世代の参加がみられず、興味はあるけれど、参加ができていないことや、地域での活動にハードルを感じて参加ができていないことが調査より明らかとなっている。その中で本イベントでは、地元の大学生が中心となり、消防団との協力のもと行うことで、参加が少ない層の参加を促せるのではないかと考える。

3.　千葉県の女性消防団員による地域連携

3.1　千葉県女性消防団 Fire Friends

千葉県の消防団には、女性消防団員のいる自治体もある。総務省による令和7年度の調査では、全国的に女性消防団員の数は増加傾向にあるという。しかし、依然として消防団員の数は減少傾向にあり、特に若年層については減少が著しい。その中で総務省消防庁では、「第5次男女共同参画基本計画」の中で、「消防団員に占める女性の割合について10％を目標としつつ、2026年度末まで当面5％とする」目標を掲げており、女性消防団員の重要性と共に入団促進を進めている。

その中で、千葉県内の女性消防団員の有志が集まり「女性の力で支える、安全で安心な地域づくり」を理念とし、多様な人々が互いに助け合いながら命と暮らしを守る社会の実現を目指すために、有志の会として「千葉県女性消防団Fire Friends」を立ち上げた。女性消防団員として培った知識・経験、そして地域とのつながりを生かし、平常時から災害時まで切れ目のない支援活動の展開をめざしている。

これまで県内の30自治体127名（図3）の女性消防団員の参加のもと、活発な意見交換会なら

図２　「防災脱出ゲーム」イベントの様子

びに防災危機管理アドバイザーによる災害事例をもとにした防災講座を開催してきている。これらの活動を通じて、自治体の枠を越えたネットワークが構築され、消防団活動や防災活動を通じた強いコミュニティが醸成されている。

千葉県内の女性消防団員の活動実態をみると、自治体の財政状況、地理的状況、想定する災害状況などにより、活動内容や活動場所、そのために整備されている建物や資機材に大きな違いや差があることが、調査より明らかになっている。例えば、女性だけで構成された独立した分団の自治体もあれば、男性団員と同様に活動を行う自治体、消防本部付けとして位置付けられ配属される自治体など、組織体制だけでも大きく異なる。さらに、活動場所については、男性と同じ施設を拠点とする自治体、女性のみが使える施設を拠点とする自治体、拠点となる施設がない自治体、など同様に整備実態にも大きな差があることがわかっている。

こうした実態も、自治体の枠を越えたネットワークがなければ共有されることはない。基本的に、同じ志を持って入団していることに差はないが、整備の実態によって、活動に大きく影響していることがわかる。

総務省が掲げる女性消防団員の増加は、災害時の事を踏まえても急務であるが、実際の活動現場の整備が伴わないことが大きな課題であり、女性の増加を妨げている原因のひとつでもあるともいえる。

こうした中で、それぞれの活動実態を共有する場として、千葉県消防団Fire Friendsは意義ある事例であると考える。

3.2　千葉県女性消防団災害支援チーム

千葉県女性消防団Fire Friendsの活動団体を基盤として、さらに実践的な防災活動ならびに災害支援を行うことを目的として、「千葉県女性消防団災害支援チーム」がある。本チームは、これまでの千葉県女性消防団Fire Friendsの活動から培われたネットワークを基盤とし、相互支援を可能とする災害支援チームとして、さらなる支援活動の展開を図るために設置された。具体的には、千葉県内で発生した災害において、被災自治体の災害現場等で活動する女性消防団員を支援することを目的としている。

これまでの災害対応の経験から、災害現場や避難所において女性消防団員の数が限られ、活動が十分に行えない場面や、被災者への細やかなケアが行き届かない状況が少なからず見受けられている。そのような課題を踏まえ、同じ志をもつ団員同士が連携し、互いに支え合う体制を構築することが急務であると考え、小規模な団体や地域単位の消防団活動を超えて、県内全域の女性消防団員が協力し合う仕組みを整えることにより、災害時における迅速かつ効果的な支援活動を可能とし、女性消防団員の活動のさらなる充実を図ることができる。

これらの活動は、あくまでも女性消防団員として活動実績があることが前提である。そのう

図 3　千葉県女性消防団 Fire Friends の活動事例

えで、各自治体での公的な活動とは別に、有志として集まり、自己の責任のもとで活動を行っている。

一方で課題としては、公的に定められた団体ではないことである（R７.10月時点）。そのため、女性消防団員の支援のために災害時に被災地支援を行ったとしても、自己責任であり、すべては自己負担となる。さらに、消防団員である場合、各自治体の定めた規定のもと活動を行うことが決まっているため、自治体によっては、任意団体である本チームへの参加そのものが消防団活動の妨げとして認識されることもある。こうした課題を解決するためにも、各公的機関からの承認を得ることが今後の最大の課題である。

3.3　女性消防団員に着目した活動

千葉県だけでなく、全国には自治体の枠を越えた活動を行う、女性消防団の連絡協議会を設立する事例もある。こうした実態の上には、まだまだ災害時の女性支援に課題があることがいえる。これまでにも、災害時の女性に対する犯罪や、支援の不足は訴えられてきており、マニュアル上ではその対策がなされている。しかし、実際には避難所で対応ができていないことや、対応自体が後回しにされることが多々見られてきており、ただのルールにしか過ぎないのが実態である。多様性を掲げる時代だからこそ、さらなる充実と理解を得ることが重要であり、千葉県女性消防団災害支援チームのような、実践的な支援体制の構築と活動支援は、いつ発生してもおかしくない災害に向けて非常に重要であると考える。さらに、多様性やジェンダーレスの考えをより的確に反映させるためには、まず、女性消防団員という位置づけの理解者と実践者が必要であるとも考える。

そのうえで、女性消防団員の増加を図るためにも、まずは消防団施設の整備や資機材の充実を行うことが必要であり、そうした実態の把握を合わせて行っていきたいと考えている。自治体による、整備状況の差が災害時の支援の差を生じさせているようなことがあってはならないためである。そのため、こうした実態をもとに、各自治体が行っている公共施設再編における施設整備については、さらなる方法論の構築が必要であり、建築計画的視点からも、さまざまな課題の解決に向けて取り組むべきだと考える。

4.　まとめ

本稿では、消防団との連携のもと行った防災教育を目的とする防災イベント、および、千葉県内の女性消防団員による支援チームについて報告したが、こうした消防団と地域との連携や自治体の枠を超えた消防団同士の連携など、いつ来るかわからない災害に対して非常に重要であると考える。さらに、昨今さけばれるようになった多様性やジェンダーレスの社会の構築をめざすためにも、女性消防団員の活躍に期待したいところである。

さらに、地域で活動する消防団としてはこうした活動事例のような、大学や企業等との連携強化を促進させていきたい。そのための実績として活動を行うとともに、地域のための支援を拡大させていきたい。

参考文献

1）　令和6年度都道府県・政令指定都市男女共同参画主管課長会議資料「女性消防団の確保について」、総務省消防庁国民保護・防災部地域防災室、令和7年1月

2）　消防団の組織概要等に関する調査（令和7年度）の結果、総務省消防庁、令和7年8月

3）　消防団員確保に向けたマニュアル、総務省消防庁、令和7年1月

図４　地域の消防団管轄分団との連携